

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26760001

研究課題名(和文) 越境する人口集団の持続的健康 中国海南省文昌市大宝村を中心とした拡がり

研究課題名(英文) An estimate of the historical population trend of a migrant-sending community in Hainan Island, China

研究代表者

井上 陽介 (INOUE, Yosuke)

東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・特任助教

研究者番号：80722016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、中国海南省文昌市の村落に保管されている家系図の情報を利用して当地の人口の変化を復元し、東南アジア諸国に華僑として移住したことの意味を、人類生態学・人口学の立場から検討することである。具体的には、出生年、死亡年、および出稼などの理由によって転出した年の情報を使用して、1900年以降の人口推移を推計した。その結果、新中国成立以前にタイなどへの移住が多くあったこと、それに伴って1950年代中盤にかけて、人口が減少していることが明らかになった。その他の期間の人口は増加傾向にあり、1980年代の一人っ子政策導入による影響は特に見受けられなかった。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is to reconstruct the population trend of a migrant-sending community in Hainan Province, China, using information obtained from their genealogical chart. It was reported that there used to be a large number of out-migration to East Asian countries (e.g., Thailand and Malaysia) particularly before the World War II. Results showed that there were many migrants to Thailand in this community and that there was a decline in the number of villagers during the period between the mid-1930s to the mid-1950s, which might have protected the villagers from starvation during the Great Chinese Famine. The population increased in the other periods and we did not observe a distinct impact of the one-child policy on the population trend in this community.

研究分野：人類生態学

キーワード：地域研究 海南省 家系図 人口学 移住 移民

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進む中で、人びとは自由に移動するようになった。具体的には、交通インフラが発展し、移動に関する政治的な規制が緩和されていく中で、人びとの行動範囲が地理的に制限される傾向が弱くなったということである。国際移住機関 (International Organization of Migration) の 2006 年の推計によると、世界の国際移民は 2 億人であり、地球人口の約 3% を占める。また農村から都市へ国内で移動することによって都市化が急速に進み、2007 年には世界人口の半数以上が都市に暮らすようになった。

ここで重要なことは、特定の人口集団を捉えるうえで従来想定していた枠組み (主権国家体制、都市-農村の対比など) が意味を持たなくなりつつあるということである。人びとは行動範囲を広げ、これまでの枠組みとは異なる、政治的・経済的・文化的な越境空間を形成しつつある。健康問題を理解するうえで、人々が暮らす生活の範囲をきちんと把握することは欠かすことができない重要な事項である。つまり、越境空間の形成が持つ意味合いを健康という観点から検討することは、人類の持続的な健康を達成する上での第一歩となる。

本研究が対象とする中国海南省 (図 1) は、東南アジアをはじめとした世界各地に華僑を多く輩出してきたことで知られる。特に海南省文昌市で「文昌鶏」として食されてきた大衆料理が、東南アジアの各地で「海南鶏飯 (ハイナン・チキンライス)」として親しまれていることはその傍証といえよう。華僑は、今日の「越境する人口集団」の先行事例ともいえ、政治的・経済的・文化的に強固なネットワークを世界の様々な地域に構築してきた。

これまでの華僑研究は移住先の状況に着目した研究が多い。たとえば文昌出身の華僑に関しては、南米の小国スリナム共和国における華僑研究 Paul B. Tjon Sie Fat (2009) “The Inevitability of Ethnic Performing” (アムステルダム大学出版社) がある。ところが、出身コミュニティに焦点

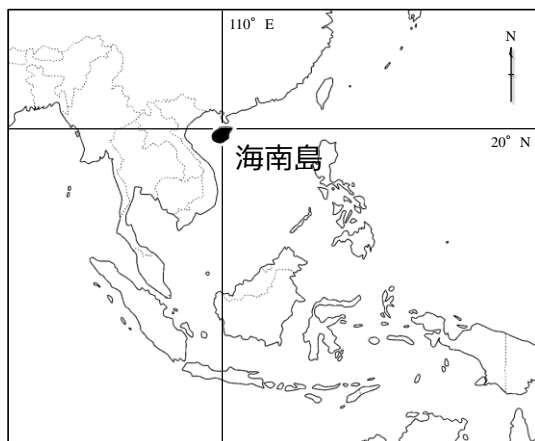


図 1. 東南アジアの中の海南島

をあてた研究はほとんどない。その数少ない一例として、文昌文化研究会が編集した『文昌華僑文化 (林明仁著 南方出版社 (中国語))』を挙げることは出来るが、健康との関連について言及はなされていない。申請者は、こうした現状を踏まえ、華僑の出身コミュニティと移住先コミュニティの両方を対象に、健康に焦点を当てた研究を展開することを計画し、本研究課題においては、華僑の出身コミュニティにおいて、どのような要因が移住を後押ししたか明らかにすることをめざした。

2. 研究の目的

代表者の研究の最終目標は、国際人口移動による越境空間の創出と人々の持続的健康の達成の関係を明らかにすることである。その中で、特に本研究課題では以下の目的を設定した。(1) 文昌市大宝村に保存されている家系図の情報や当地での聞き取り調査によって得た情報をもとに、過去 150 年の同村の人口数 (= 集団の健康の指標) の推移を算出すること、(2) 各年代のコメ収量から食糧生産性 (= 環境収容力の代理指標) を推計すること、さらに (3) 人口数と食糧生産性のバランスから対象集団へかかる人口圧を推定することで、華僑輩出という歴史的イベントを集団の健康という観点から明らかにすることである。

しかしながら、後述するように、本研究実施期間中に現地調査をする許可が取り消されてしまったため、研究の規模を縮小し、主に (1) の目的を中心に研究を展開した。

3. 研究の方法

研究の対象地：

本研究は代表者が平成 23 年よりライフスタイルの都市化が引き起こす健康影響についてフィールド調査を進めている大宝村 (図 2) において実施された。大宝村は人口約 1,000 人の主に漢族が居住する農村部コミュニティであり、コメや野菜のほか、ライチ、ゴム、パイナップルなどの換金作物を栽培することで生計を立てている。

平成 23、24 年に実施した予備調査において、大宝村に居住する林、符、鄧、劉氏など複数の氏族が家系図を所有していることを確認していた。さらに、フィールドワークの最中の聞き取りで、1940 年代までに、タイ・シンガポール・マレーシアなどの東南アジア諸国に相当数移住していること、最近でもシンガポールに嫁いでいたり、先述のスリナム共和国へ出稼ぎに行ったりする若年層がいることなどが明らかになっていた。こうしたフィールドワークにおける発見が、本研究課題の着想のきっかけとなった。

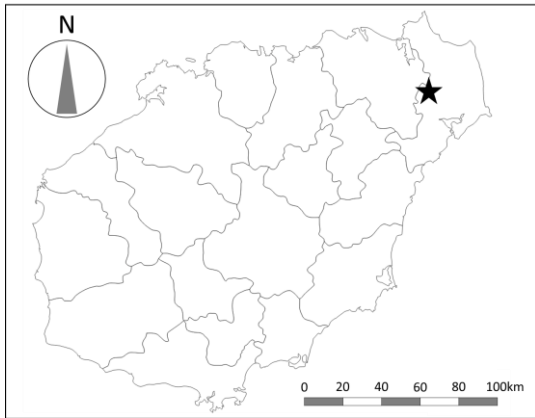


図2. 大宝村の位置

調査許可に関して：

本研究課題を遂行する上で、現地における聞き取り調査は欠かせない。しかし、平成26年10月に、現地政府による調査許可が取り消された。その後、定期的に共同研究機関を訪問したり、メール・電話でのやり取りを行なったが、状況は好転しなかった。最後まで研究許可取り消しに関する詳細な理由は明らかにされなかった。

平成27年度には、調査許可を取得することができた福建省の農村部コミュニティを訪問し、類似の調査研究ができないか模索した。福建省も多くの移民を輩出していることで知られており、本研究課題を実施する代替地となる可能性があったが、ふさわしい歴史資料を見つけることができなかった。そこで、追加の現地調査を行わなくてもある程度の人口推移の推測が出来る大宝村の一つの氏族（符氏）に焦点を当てて、研究を進めることにした。

符氏の家系情報について：

符氏には一族が作成した家系図（以下、符氏族譜という）が存在する。符氏族譜では始祖は黄帝（古代中国の帝王の一人）であるとされており、そこからの系譜を迎えることになっている（そもそも黄帝が実在するかどうかなについては議論があり、家系図は部分的に神話の世界の話である可能性はある）。

符氏と名乗った第一世とされているのは、秦の時代の公雅であり、そこから中国各地に符氏は広がっている。約50万人居住している海南省では、符氏は最も多い姓である。また符氏族譜によると、海南島から海外に出た符氏は十数万人程度であるとされる。

ちなみに代表者がフィールドワークの中で入手した資料は、地理的・血縁的に近い人々の家系図情報（2004年ごろまで）を載せた分冊であり、文昌市、瓊山市、万寧市、屯昌市、瓊中市、儋州市に暮らす符氏の家系図情報を収録した500ページ程度の冊子である。なお、調査時点で大宝村に居住している人の中で最も若い世代は、第74世であった。

家系図の整理・人口推移の復元：

予備調査を開始した段階では符氏族譜の存在は明らかになっていなかったこともあり、代表者は基礎情報収集の一環として、大宝村に居住する人を中心にした親族関係の聞き取りを独自に行っていた。この調査結果を家系図作成ソフト Genopro を使用して整理して家系図を作成し、その家系図を村人に見せながら、情報をさらに収集して、その聞き取り調査の結果を家系図に反映させるという作業を繰り返していった。本研究では、予備調査の最終段階で見つかった符氏族譜に含まれる情報を利用して、家系図情報を拡充させた（図3）。本研究では1900年以降の符氏の人口推移を推計することとし、それぞれの時期に大宝村に居住していた人数は、出生年、死亡年、村落外への移動年の情報を使用し、表計算ソフトで集計することで算出した。

また人口推移を推定する上で、いくつかのルールを設けた。一つは、男性だけを分析対象にしたことである。これは、家系図に女性の情報が含まれないことがしばしば起こることに対応するためである。最近の世代に関しては、村で誕生した女性の情報はもちろんのこと、配偶者の出生年などについても記載されているようであるが、時代を遡ると必ずしもそうではないと判断した。二つ目は、符氏族譜でも聞き取り調査でも明らかにならなかった情報があった場合の対応についてである。具体的には、一番近い兄弟との差異を3歳、親と第一子の差異を2.5歳、夫婦の差異を2歳（夫が年上とした）、さらに死亡年または死亡時年齢が明らかではない場合の年齢は70歳、出稼ぎ時の年齢が不詳の場合は20歳という仮定をそれぞれおいた。

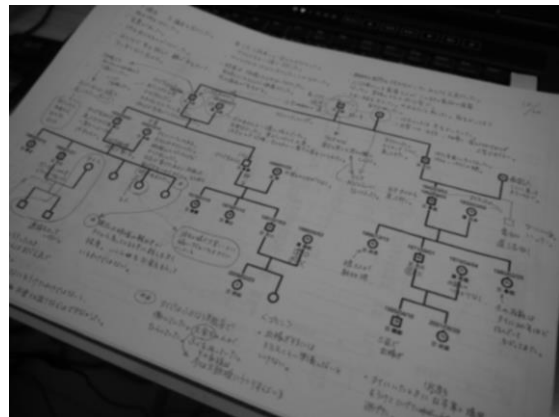


図3. Genopro で作成した家系図に聞き取り調査による情報を加筆したもの（プライバシー保護のために加工済）

4. 研究成果

人口推移の復元の結果：

1900年から2011年の大宝村の人口推移の復元に使用されたのは、1830年から2011年の間に大宝村で出生した288名の男性の

情報である。図4で示すのが人口推移を復元した結果である。1930年代後半から1950年代中盤にかけて、大宝村の人口は減少したことが明らかになった。また、1949年の新中国成立までの期間には、多くの人々がタイなどの海外へ移住していた(表1)。1970年以降の人口はおおむね上昇傾向にあり、1980年代後半からの一人っ子政策導入による影響は特に見受けられなかった。近年も人口は増加傾向にあるものの、村外への人口移動が多く観察された。

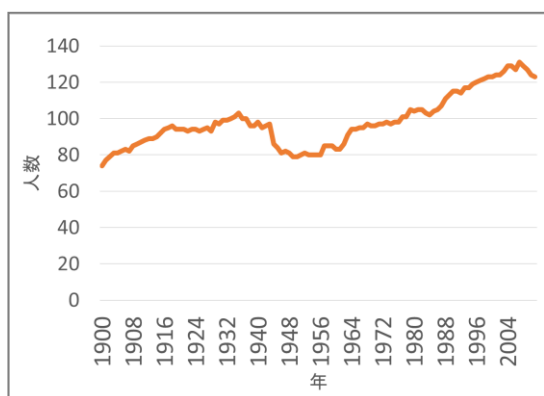


図4. 大宝村における人口推移 (1900年～2011年)

表1. 大宝村から移住した男性の数

	海外	国内
1900～1948	タイ12名、マレーシア2名	1名
1949～1980	タイ2名	7名
1980～2011	スリナム2名	22名

結果の解釈：

1930年代後半からの人口減少の理由のひとつは、タイなど多くが移住したことであると推測される。1900年から1949年の間にタイへ移住した男性が12名、マレーシアに移住した男性が2名おり(表1)、符氏族譜にはこれらの移住者の子供・孫の情報も多く記載されている。また、こうした移住者の中には、タイでタイ人と結婚して作った子供を大宝村に連れて戻ってきて、本人は再度タイに戻ったというケースもあった。

旧日本軍に殺害されたものは2名いた。大宝村から約5キロの距離の大致坡という場所に駐屯していた旧日本軍によって1943年に殺害されたという。ちなみに、第二次世界大戦中に海南島には4万人ほどの日本人が居住していたとされる。大宝村には旧日本軍の軍人相手に商売をしていたという高齢者もあり、「タバコ」などの単語を知っていた。

聞き取り調査の際には、1950年代後半から1960年代前半、特に1962年の飢饉の際の生活の苦しさを語る高齢者が多くいたが、人口数の推移という点では、大きな変動は見られなかった。しかしながら、先述のタイなどへ

の移住がなかった場合には、より生活は困窮していた可能性はある。

1970年代以降の人口増加は公衆衛生の改善や食糧生産性の向上や人口移動が長く制限されていたことが大きな要因であろう。近年では国内他地域への出稼ぎ、また大学への進学を契機とした転出が多いにも関わらず人口は増加している。これは、農業以外の収入源を持つものが増えたことで、農地面積が人口増加のボトルネックにならなくなってきたことが、寿命の伸長とともに理由として考えられる。

1979年以降に導入された一人っ子政策の影響はあまり見られず、第二子、第三子をもっている家族も多くいた。農村である大宝村では、一人っ子政策がきちんと遵守されなかったようである。とはいえ、決して若年層が多く居住しているわけではなく、若年層の都市部への人口流出は続いており、近い将来に大宝村の人口が大きく減少する可能性は否定できない。

本研究の限界と強み：

本研究の限界の1つ目は、人口推移の推計の際に使用した仮定の妥当性についてである。特に、死亡年や死亡時年齢が不明である場合に死亡時年齢を70歳と仮定したことが挙げられる。死亡時年齢が不明であった男性の多くは、出生時平均余命が短かった時代の男性であった。20代や30代で亡くなることも少なくなかった時代に、70歳で死亡するという仮定を置いたことは、人口数の過大評価になっている可能性がある(つまり、本研究で推計した初期の人口数は実際よりも多い可能性が高い)。2つ目は、女性を分析対象としていないという点である。女性を分析対象外とした理由は、年代によって女性が符氏族譜に記載されるかどうかの確率が違うこと、また大宝村で生まれた女性がいつ結婚して村外へ転出したかという情報がきちんと収集できないことによる。しかしながら、海外へ出稼ぎに出た多くが男性であったことなどを考えると、実際の人口数の推移は男性の推移よりも緩やかであったと考えられる。

本研究の強みは、符氏族譜があることである。従来の方法で家系図を作成する場合、人々の記憶に依拠するため、遡ることができない情報に限界がある。しかしながら、本研究では(遡るほど情報の正確性が怪しくなっていくとはいえ)、かなり前の世代まで遡ることができる。また、家系がすでに断絶しており、現代の大宝村の誰もが知らない個人についてや、幼児期の死亡など外部の人間である外国人研究者にわざわざ語ろうとしない(もしくは記憶から抜けている)個人についても、符氏族譜の情報があることで人口推移の推計に含めることができるのができるのは、本研究の大きな強みである。

結論：

海南省文昌市大宝村の人口推移を家系図情報を使用して復元した結果、1930年代後半から1950年代中盤にかけて人口が減少したことが明らかになった。そのほかの時期については人口は増加傾向にあった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

1. Yazawa, A., Inoue, Y., Stickley, A., Li, D., Du, J., & Watanabe, C. (2015). The Effects of Season of Birth on the Inflammatory Response to Psychological Stress in Hainan Island, China. PloS One, 10(10), e0139602. (査読あり)
2. Inoue Y., Stickley A, Yazawa A, Li D, Du J, Jin Y, Chen Y, and Watanabe C. (2016). The association between economic development, lifestyle differentiation and C-reactive protein concentration within rural communities in Hainan Island, China. American Journal of Human Biology, 28:186-196 (査読あり)

[学会発表] (計 2 件)

1. Inoue Y., Yazawa A, Stickley A, Li D, Watanabe C. Activity space expansion and its association with subjective quality of life in the initial stage of economic development in rural Hainan, China. アメリカ人間生物学会、2015年3月25日、セントルイス(アメリカ合衆国)
2. Yazawa A, Inoue Y., Stickley A, Li D, Watanabe C. The interaction of season of birth on the association between QOL and inflammation in China: A Cohort effect?, アメリカ人間生物学会、2015年3月25日、セントルイス(アメリカ合衆国)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
<http://www.inoyo.net>

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
井上 陽介 (INOUE, Yosuke)
東京大学・大学院医学系研究科・特任助教
研究者番号：80722016
- (2) 研究分担者
なし
- (3) 連携研究者
なし
- (4) 研究協力者
なし